

叙事詩の宗教哲学  
—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XIII) —

茂木秀淳

<Mokṣadharmā 和訳><sup>1</sup>

[213章] (=D. 220章、7984-8003) (cf.MBh.XII.154)

ユディシュティラは言った。

- (1) 何をすれば、安楽を得るのか。何をすれば苦を得るのか。この世で完成した人は、何をなしつつ恐れなく歩むのか、バーラタ族よ。

ビーシュマは言った。

- (2) 聖典に専心する<sup>2</sup>長老たちは、自制 (dama) を称賛する。あらゆるヴァルナの中で、特にバラモンの (自制を称賛する)。 (cf.MBh.XII.154.7)
- (3) 自制なき者にとっては、行為の完成が正しく獲得されることはない。 (cf. MBh.XII.154.8ab) 祭式、タパスそしてもろもろの知識は、すべて自制に依存している。
- (4) 自制は熱力を増大させる。自制は浄化具であると言われる。罪なく恐れなく自制した人は、「偉大なもの」 (mahat) を獲得する。 (cf.MBh.XII.154.9)
- (5) 自制して、安楽に眠り、安楽に目覚め、安楽に、世界において振る舞う<sup>3</sup>人の心は清浄である。 (cf.MBh.XII.154.12)
- (6) 威光は自制によってしっかりしたものとなる。それを粗野な人は理解しない。彼は自分の中に (pṛthagātmani) 常に多くの敵を見るのである。
- (7) 生き物には、肉食動物からの<sup>4</sup>恐れがあるように、(人々には) 粗野な人々からの恐れが常にある。彼等を制御するために、自存者によって (svayambhuvā) 王が創造されたのである。
- (8) あらゆる生活期において、自制こそが優れている。 (cf.MBh.XII.154.14ab) それら (生活期) の中で、義務 (dharma) における果報よりも、自制においてもたらされる果報の方が大きい、と言われている。

<sup>1</sup>本稿は『叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XII)—』(信州大学教育学部研究紀要第96号1999年3月)に続くものである。略号などは前稿に準ずる。

<sup>2</sup>śrutisamādhayaḥ Cn. śrutisamādhayaḥ vedadraṣṭāraḥ Cp. śrutau vedānte samādhiś cittaikāgryaṃ yeṣām

<sup>3</sup>loke viparyeti Ca. viparyeti veśeṣataḥ saṃcarati

<sup>4</sup>kravyādbhya(h) N. kravyādbhyaḥ vyāgrādibhyo māṃsabhakṣakebhyah

- (9) 私はこれからいくつか特徴を述べるが、自制とはそれらの集合である。(cf.MBh.XII.154.14cd)それらは、吝嗇ならざること、激情なきこと、満足、信頼性、
- (10) 怒りなきこと、常に正直であること、大言なきこと、自惚れなきこと、師匠を敬うこと、嫉妬なきこと、生き物に対する同情、告げ口をしないこと、(cf.MBh.XII.154.17ab)
- (11) うわさ・うそ・追従(称賛)・非難なきことである。(cf.MBh.XII.154.17cd) 善を願い、羨むことなければ、人々の間で信頼を得るのである<sup>5</sup>。(cf.MBh.XII.154.17cd)
- (12) 敵意なく、振る舞いよく、非難と称賛を等しく見なし、行儀良く、徳を備え、静かな自己をもち、氣力に満ち、目覚めたる者は、この世では尊敬を得、死後は天界に赴くのである。(cf.MBh.XII.154.23)
- (13) (彼の人)はあらゆる生き物の幸福に心を砕き、自惚れによって人を憎むことなく、大きな湖のごとく、動揺せず、英知に満足して清浄となるのである。
- (14) あらゆる生き物を恐れず、それ故あらゆる生き物にとって恐れとならず、あらゆる生き物の尊敬の対象となるのは、自制し、知識ある者である。(cf.MBh.XII.154.26ab, 185.4ab)
- (15) 大きな財産に (mahaty arthe) 喜ばず、災難においても悲しまない。このような、中庸の英知を持つものが、自制ある再生族と言われるのである。
- (16) 祭式によってヴェーダを満たし、正しい清浄な振る舞いによって、常に自制を身に備えたる者が、大きな果報を享受するのである。
- (17) 悪意なきこと、辛抱強いこと、寂靜、満足、よき言葉を語ること、真実、布施、心労なきこと、これは悪しき自我を持つものの道ではない。
- (18) バラモンは、欲望と怒りを制御し、梵行を行ない、感官を制御して、恐ろしい苦行 (ghore tapasi) を越えて、誓約に厳格であり、静かに時を待ち、不滅の者のごとく<sup>6</sup>、氣力あふれて、世間に行くべし。

[214章] (=D. 221章、8004-8020)

ユディシュティラは言った

- (1) 再生族たちは、誓約を守りつつも、バラモンとしての願望のために<sup>7</sup>供物を食べ物として食べる。これは何故なのか、祖父よ。(cf.MBh.XIII.93.1)

<sup>5</sup>P. āyāti pratyayaṃ nṛṣu D. āyātīm pratyayeṣu ca Ca. āyatau uttarakāle pratyayo 'syeti āyatipratyayaḥ / āyatiman pratyayo 'syeti dīrghadarśī vā Cn. nāyātīm pratyayo nṛṣu iti pāṭhe phalasaṃvādena viśvato nṛṣu ādaraṃ na kuryāt kiṃtu prāḡ evākṛtakāryeṣu sādhuṣv aviśvāso na kartavya ity arthaḥ Cp. āyatīyām uttarakāle pratyayaḥ, tadāṭve duḥkhasahiṣṇutā Cs. āyatipratyayaḥ dīrghdarśī

<sup>6</sup>nirapāya iva Cp. nirapāyaḥ manodauḥsthyarahitaḥ

<sup>7</sup>brāhmaṇakāmāya Ca. brāhmaṇakāmāya brāhmaṇecchānurodhāt Cs. asmin daive paitrye vā kṣaṇaḥ kartavya iti brāhmaṇāvekṣayā

ビーシュマは言った。

- (2) ヴェーダに述べられていない誓約を守り、(供物を) 食べる者は、為すべき事を為す者たちである<sup>8</sup>。そして、ヴェーダに述べられたもの(供物)を食べる者は、誓約を破るものである<sup>9</sup>、ユディシュティラよ。(cf.MBh.XIII.93.2)

ユディシュティラは言った。

- (3) 凡夫たちは断食のことを苦行(tapas)と言う。苦行とはそのようなものか、偉大なる王よ。あるいは(そうでなければ)、苦行とは一体いかなるものか。(cf.MBh.XIII.93.3)

ビーシュマは言った。

- (4) 人々は、苦行とは半月の断食であると考えている。善き人々にとって、それはアトマンの聖典を損なうものであり<sup>10</sup>、それが苦行であると考えないのである。(善き人々には、)棄却と謙譲が<sup>11</sup>、最高の苦行であると教えられている。(cf.MBh.XIII.93.4, 5ab)
- (5) (棄却と謙譲を實踐するならば、その者は、)常に断食をする者となろう、常に梵行を行なうものとなろう。バラモンは常に聖者となり、常に神の供物を食べることになろう。(cf.MBh.XIII.93.5cd, 6ab)
- (6) ダルマを望む家長は、常に眠気なき者となろう、バーラタ族よ。(彼は、)常に肉を食べることはなく、そして常に浄化具を低誦する者となろう<sup>12</sup>。(cf.MBh.XIII.93.6cd, 8cd)
- (7) (彼は、)常にアムリタを食べ、毒を食べることはないであろう。常に残り物を食べるもの(vighasāṣī)となり、常に客を好むものとなろう<sup>13</sup>。(cf.MBh.XIII.93.7ab, 8ab)

ユディシュティラは言った。

- (8) どのようにして、常に断食をする者となるのか。どのようにして梵行者となるのか。どのようにして、残り物を食べるものとなるのか、そして常に客を好む者となるのか。(cf.MBh.XIII.93.9)

ビーシュマは言った。

<sup>8</sup>kāryakāriṇaḥ Ca,Cn.: kāryakāriṇaḥ kāmācaravantaḥ Cp. kāryakāriṇaḥ abhīṣṭasampādakāḥ

<sup>9</sup>P. vrataluptā D. vratalubdhā Ca. vrataluptāḥ luptavratā evety arthaḥ / vratam uktāḥ vratalubdhā iti ca pārthe pūrvāparavākyayoḥ praśnānugatvatm ākulam iva

<sup>10</sup>ātmatantropaghātaḥ Ca. ātmatantram ātnaprasāsakam sāstram, tatra pratipāditaḥ prāṇāyāmādi nityanaimittikādi ca, tantram iva sādhatvād ātmajñānasya Cn. ātmatantram ātmavidyā Cp. tantryate jñāyate yena tat prāṇāyāmādi prañavajapādi vā Cs. ātmatantropaghataḥ śarīrākhyadharmaparikarapīḍanam

<sup>11</sup>tyāgaś ca sannatiś ca Ca. tyāgaḥ mānaso viśayasya rāgatyāgaḥ / sannatir vinītatvaḥ śāstropadeśaniṣṭhatvam Cp. tyāgaḥ rāgādeḥ / sannatir vinītatvam / Cs. tyāgaḥ karmaphalatyaḥ / sannatir anahaṃkāraḥ

<sup>12</sup>P. pavitraḥ ca sadā bhajet D. pavitraś ca sadā bhavet

<sup>13</sup>P. caivāthipriyaḥ quad D. caivāthivrataḥ

- (9) 朝食と夕食の間に何も<sup>14</sup>食べない者は、常に断食するものとなろう。(cf.MBh.XIII.93.10)
- (10) 梵行を行なうバラモンは、ある決まった時に、妻を尋ねるべし。その者は、知識に専念し、常に天則リタを説く者となろう<sup>15</sup>。(cf.MBh.XIII.93.11)
- (11) あるいは、無駄に<sup>16</sup>肉を食べなければ、肉を食べぬ者となろう。浄化具とは布施に専心する者であり、昼間眠らぬ者が眠気なき者である。(cf.MBh.XIII.93.12)
- (12) 使用人や客が食べ終わったものを常に食べる者は、完全なアムリタを食べると知るべし、ユディシュティラよ。(cf.MBh.XIII.93.13)
- (13) いつも(使用人や客が)食べ終わらない時には食べない再生族は、この食べないということによって、天界が得られるのである。(cf.MBh.XIII.93.14)
- (14) 神々のために、祖先のために、使用人のために、客と共に、残り物を食べる人を、人々は「残り物を食べる人」と言う。(cf.MBh.XIII.93.15)
- (15) 彼等は限りなき世界をもち、ブラフマンと共に座し、アプサラスによってかかずかれ、天に住む者として(限りなき世界を)歩み廻るのである。(cf.MBh.XIII.93.16)
- (16) 神々と共に、そして祖先と共に食事をし、息子や孫と共に遊ぶ者の行き先はこの上なきものである。(cf.MBh.XIII.93.17)

[ 2 1 5 章 ] (=D. 2 2 2 章、8021-8057)

ユディシュティラは言った。

- (1) この世界においては、善きにせよは悪しきにせよ、果報との結合によって、人(puruṣa)を縛る行為がある、バーラタよ。
- (2) その(行為の)行為者は人(puruṣa)なのか、あるいはそうではないのか、という疑問がある。それについて、ありのままに、汝から聞きたい、祖父よ。

ビーシュマは言った。

- (3) ここでも人はこの古譚を語る。プラフラーダとインドラの対話を、ユディシュティラよ。
- (4) 執着なく、罪悪を振り払い、よき家に生まれ、多聞にして謙遜、利己的でなく、真理に住し、秩序を(samaye)喜び、

<sup>14</sup>P. kathaṃcana D. 'ntarā punaḥ

<sup>15</sup>P. ṛtavādī sadā ca syāj D. ṛtavādī bhaven nityam Ca. ṛtavādītvasyāmāṃsāsītvaṃ anṛtavadane yāparahimṣā tatparihārāya lākṣaṇikam

<sup>16</sup>vṛthā Cn. vṛthā devapitrśeṣaṃ vinā Cs. vṛthāmāṃsam ayajñāśiṣṭham

- (5) 非難と称賛とを等しく見なし、自制し、空家(なる身体)を住いとし<sup>17</sup>、動不動の生き物の生成消滅を認識し、
- (6) 悪しきことにも善きことにも、怒ることも喜ぶこともなく、金と土塊との両者を等しく見なし、
- (7) 自己の幸福の認識において確固としており、明確な定見をもち、存在するものの高低を知り、一切知をもち、(すべてを)等しく見る目をもち、
- (8) 感官を制御して一人で座っているプラフラーダに近づいて、シュクラは、彼の英知を享受せんとして、次の様に言った。
- (9) この世で人々の間では人はある徳性によって称賛されるが、そのすべてが、汝において失われていないのを<sup>18</sup>、我々は見るのである。
- (10) また、汝の意識(buddhi)は、子供と同じ様にここでは見える。汝はアートマンを考察しつつ、この世での幸福(saṃśreyah)とはいかなるものとするのか。
- (11) 紐で縛られ、住居から離れ、敵の支配に遭い、幸運に見捨てられたのに、プラフラーダよ、汝は、(これら)悲しむべきことに悲しまない。
- (12) 英知を獲得した故なのか、ダイテーヤよ、あるいはまた堅固さをもつ故にか、自分の不幸を見つつも、プラフラーダよ、汝は元気な姿をしている。
- (13) このように彼に動かされて、確固とした見解をもつ賢者プラフラーダは、自らの英知を声にしつつ、穏やかな言葉で語った。
- (14) 生き物の活動と停止とを認識しない者は、愚かさの故に、慢心があることになろう<sup>19</sup>。しかし、(生成消滅を)観察する者には慢心はない。
- (15) あらゆる存在物(bhāva)そして存在しない物も同様に、本性によって(svabhāvāt)活動し停止するのである。(従って、)人の目的は(puruṣārtha)存在しないのである。
- (16) 人の目的が存在しなければ、自らを行為者とするものは何も存在しないのである。自ら行為する者(と思う者)には<sup>20</sup>、この世界において、自惚れ(māna)が生じるであろう。
- (17) しかし、自らを善悪の(行為の)行為者であると考える者の認識(prajñā)は誤っており、自分の姿を知らないのである<sup>21</sup>、というのが私の考えである。

<sup>17</sup>śūnyāgāraniveśanam Cp. ahamtāmamataḥkartṛtvabhoktṛtvādisūnyam āgāraṃ grhaṃ śarīraṃ tatra niveśanam pra-  
veśo yasya tam

<sup>18</sup>bhavaty anapagān sarvāṃs Cn., Cp.: bhavati tvayi anapagamān sthirān

<sup>19</sup>stambho bhaved Ca. stambhaḥ kartavyatāmohaḥ

<sup>20</sup>P. svayaṃ tu kurvatas D. svayaṃ na kurvatas D. の「自ら行為しなくとも、それでも自惚れは生じるであ  
ろう」の方がわかりやすい。

<sup>21</sup>P. svamūrtyajñeti D. atattvajñeti Ca. svamūrtyajñeti svām eva mūrṭiṃ śarīraṃ svayaṃkṛtam ajānatī mūḍhā

- (18) もし、人 (*puruṣa*) が行為者であるならば、シャクラよ、常に自らの繁栄のために行為を始めるので、(行為の開始は、行為が) 完成しても、決してなくなることはないであろう。
- (19) 望ましくないことの停止、そして好ましきことの停止せざること<sup>22</sup>が、修行者の(目的として) 述べられる。それ以外に人の目的はどこにあるのか。
- (20) 望ましくないことの停止、望ましきことの存在とが、ある人々には自性として備わっていることは、勞せずとも見ることができる。
- (21) 姿よく知性優れたある人々は、姿劣り知恵少なき人々よりも、財産の獲得に執着していることは、經驗的に知られるところである。
- (22) あらゆる善悪の性質は<sup>23</sup>、自性によってつき動かされて、(人々に) 入るのである。その場合、それ(性質)について、それをもつ人の(? *tasya*) 何が自惚れの原因となるのか。
- (23) そのすべては自性によって存在する、というのが私の確固とした考えであり、それはアートマンに基づく英知である<sup>24</sup>。私には、それ以外に(英知は) 存在しない。
- (24) しかし、この世における善悪の果報の結合は、行為より生じる、と私は考える。行為の対象すべてをここで私は語るであろう。それを聞くべし。
- (25) あるカラスは、鳴きながら<sup>25</sup> 米(があること)を知らせる<sup>26</sup>。それと同様に、すべての行為は自性の目印である<sup>27</sup>。
- (26) もろもろの変異物のみを知る者は、究極的な根源 (*prakṛti*) を知らないのである。彼には、愚かさの故に、慢心が生じるであろうが、(根源を) 観察する者には慢心はないのである。
- (27) この世における一切の存在物 (*bhāvān sarvān*) を自性より生じたのものであると、確固として認識する者にとって、高慢も自惚れも何をなそうか。
- (28) 完全なダルマの規定と生き物が無常であることとを私は知った。それ故、シユクラよ、私は悲しまないのである。この世の一切は、終わりがあるのだから。
- (29) 所有意識もなく、自我意識もなく、願望もなく、束縛から解放され、元気で、(元氣な自己から) 逸脱することなく<sup>28</sup>、私は生き物の生成消滅を観察するのである。

<sup>22</sup>*aniṣṭhasya hi nirvṛtir anivṛtiḥ priyasya ca* Ca. *nirvṛtiḥ asiddhiḥ anivṛtiḥ siddhiḥ*

<sup>23</sup>*guṇāḥ* Cn. *guṇāḥ sukhaduḥkhādayaḥ*

<sup>24</sup>*P. ātmapratīṣṭhitā prajñā* D. *ātmapratīṣṭhā prajñā vā*

<sup>25</sup>*P. vadan* D. *hy adan*

<sup>26</sup>*vedayate* Ca. *vedayate, odanaṃ bhaktaṃ labhyaṃ adhuneti sūcayati, na tu sa evodanaḍāne kartā* Cs. *vedayate jihvādaṃsādīnā vedanāṃ prāpnoti* N. *kāko 'nnaṃ iva karmāṇi svabhāvaṃ prakāśayanti na tu vartayanṭīy arthaḥ* Deussen: So wie eine Krähe, indem sie isst, das Vorhandensein von Nahrung [den anderen Krähen] kundmacht, ....

<sup>27</sup>*lakṣaṇam* Ca. *lakṣaṇam anumāpakam*

<sup>28</sup>*svastho 'vyapetaḥ* N. *svasthaḥ svarūpapratīṣṭhaḥ, avyapetaḥ dehādyanabhimānena svarūpād apracyutaḥ*

- (30) 英知を完成し、自制し、渴愛を離れ、願望なく、世間の(本質を知らせる)学問によって<sup>29</sup> 観察する私には、シャクラよ、疲れはないのである。
- (31) 私は、根源にも(そこから)変異した物にも<sup>30</sup>、喜ぶこともなければ、憎むこともない。私は、今私を妬む(?)<sup>31</sup> 人を私の敵とは見なさないのである。
- (32) 上にも下にも横にもどこにも、シャクラよ、私は欲望をもつことはない。認識にも、認識の対象にも、無知にも<sup>32</sup>、(私の)避難場所(śarma)はないのである。

シャクラは言った。

- (33) この英知が獲得され、寂静が得られる手段を正しく、プラフラーダよ、尋ねている私に語るべし。

プラフラーダは言った。

- (34) 正直によって、注意深さによって、清浄さによって<sup>33</sup>、気力あることによって<sup>34</sup>、長老に対する従順さによって、シャクラよ、人は「偉大なもの」(mahat)を獲得するのである。
- (35) (人は)自性によって英知を得る。自性によって寂静に赴く。汝が見るものはすべて自性によってのみ(存在する)。

ビーシュマは言った。

- (36) このようにダイティヤの主によって言われ、シャクラは驚き、そして歓喜して、王よ、彼の言葉を崇拜したのである。
- (37) その後、彼の三界の主にして自在者たる彼は、ダイティヤの主(プラフラーダ)に礼拝して、アスラの王(プラフラーダ)に別れを告げ、自分の住居に帰った。

[ 2 1 6 章 ] (=D. 2 2 3 章, 8058-8087)

ユディシュティラは言った。

- (1) 幸運(śrī)を失い、時の杖によって打ちのめされた<sup>35</sup> 大地の守護者(たる王)は、いかなる認識(buddhi)によって、地上を行くべきか。それを私に語るべし、祖父よ。

ビーシュマは言った。

<sup>29</sup>P. lokavidyayā D. lokam avyayam Ca. は 'lokavidyayā' を示唆している。Ca. lokavidyayā, lokasvabhāvādyavabodhakaṃ jñānaṃ lokavidyā / [a]lokavidyayā brahmajñānena sārvañāphalenety akāraprasāśeṣo vā

<sup>30</sup>prakṛtau ca vikāre ca Cn. prakṛtau viśvakartryām Cs. prakṛtau purātane, vikṛte [-kāre] idāñṣṭane

<sup>31</sup>P. mamādyā mamāyate D. mām adya mamāyate N. mamāyte mameva ācarati putramitrādir ātmīyas taṃ ca na paśyāmi Ca, Cp, Cs.: mamāyate mamevācarati, Monier: to envy

<sup>32</sup>ajñāne Cs. nājñāne, ājñāne prakṛtimahadahaṃkārahūtatānāmātrākhye

<sup>33</sup>prasādena Cn. prasādena buddher nairmalyena

<sup>34</sup>ātmavattayā N. ātmavattayā jītenḍriyatayā

<sup>35</sup>kāladanḍavinīṣṭiṣṭas Ca. kālo janmāntarīyasukṛtaduṣkṛtasahakārī, tasya danḍo duṣkṛtaphaladānam

- (2) ここでも人はこの古譚を語る。ヴァーサヴァとヴィローチャナの息子バリとの対話を。
- (3) あらゆるアスラに勝利した後、ヴァーサヴァは、祖父に近づき、合掌して深々と敬礼した後、バリに尋ねた。
- (4) 布施する者の財産は決して失われないということだ。そのバリ (恩恵) を私は得ない。ブラフマンよ、私にバリ (恩恵) を示すべし。
- (5) 彼は、(太陽として) 隠れ、そして方位を照している、ということである。彼は、時に応じて、疲れることなく、雨を降らしている、ということである。そのバリを私は得ない。ブラフマンよ、私にバリを示すべし。
- (6) 彼は、風であり、ヴァルナであり、太陽であり、月である。彼は火となり、存在物を熱し、そして彼は土と<sup>36</sup>なった、ということである。そのバリを私は得ない。ブラフマンよ、私にバリを示すべし。

ブラフマンは言った。

- (7) そのように問うのは、汝にとって善きことではない、インドラよ。しかし、問われた者は偽りを語るべきではない。従って、私は、汝にバリについて語るであろう。
- (8) もしも、人が、水牛の間で、牛の間で、ロバの間で、そしてまた馬の間で生れたとしても、最も優れた者は、空家で<sup>37</sup>生まれるのである、インドラよ。

インドラは言った。

- (9) もし私が、バリによって、ブラフマンよ、空家に着いたのであれば、私はそれ (バリ) を捨てるべきか、あるいは捨てざるべきか。それを私に告げよ、ブラフマンよ。

ブラフマンは言った。

- (10) インドラよ、バリを傷つけてはならない。バリは破壊されるべきではない。インドラよ、(汝が) 望むなら、汝によってもろもろの判断 (nyāya) を<sup>38</sup> (バリは) 問われるべし、インドラよ。

ビーシュマは言った。

- (11) このように聖者によって言われ、偉大なインドラは、アイラーヴァタの背に乗って、幸運に囲まれ、大地を進んだ。
- (12) すると、彼は、ロバの姿におおわれ (=ロバの姿をして)、聖者によって言われたとおり、空家を住み家としているバリを見た。

<sup>36</sup>P. pṛthivī D. jalam

<sup>37</sup>sūnyāgare Deussen: in einem leeren Hause [als Einsiedler]

<sup>38</sup>P. nyāyāms D. nyāyas Deussen: nach seiner Lebensregel バリの考え方全般のことか。

インドラは言った。

- (13) 汝は、ロバの母胎に達して、初がらを食べている、ダーナバよ。この汝の低い母胎を悲しんでいるのか、あるいは悲しんでいないのか。
- (14) 敵の支配に入り、幸運にも友達にも去られ、精力も勇気も失うという予期せざる不幸を (*adr̥ṣtam*) 私は (汝に) 見るのである。
- (15) 種々の (*yat tat?*) 千の乗り物によって<sup>39</sup>、親戚によって囲まれ、このあらゆる世界を熟しつつ、我々を考慮することなく、汝は進んだ (*yāsi*)。 (=MBh.XII.217.2)
- (16) 汝を長とするダイトヤたちは、汝の命令下に住んでいた。耕されずに実る<sup>40</sup>大地は<sup>41</sup>汝の支配下にあった。汝の今日のこの災難を、汝は悲しむのか、あるいは悲しまないのか。
- (17) 近くの海の東の岸において光を發しつつ (?)<sup>42</sup>、親戚のために財産を分けた時、その時の汝の心はどうであったか。
- (18) 千人の群れの女神たちが、多くの年月、庭園において幸運によって輝きつつ、汝と踊った (*yat*)、
- (19) 女神はすべて花の首飾をつけ、すべて金のごとく輝いていた。今や、汝の心はどうか、ダーナヴァの主よ。
- (20) 汝には大きなよき色の宝石で飾られた日傘があった。そのもとで、六千のガンダルヴァたちが七種の<sup>43</sup>舞を舞った。
- (21) 汝が祭式を行なう時すべて金でできた大きな祭柱 (*yūpa*) があった。そこに、1万アユタの牛が捧げられた。
- (22) 杭を<sup>44</sup>投げる規則に従って、祭主として地上すべてを歩いた時、その時、汝の心には何があったか。

<sup>39</sup>P. *tad yānasahasreNa* D. *yānasahasrais tvam*

<sup>40</sup>*akṛṣṭapacyā* Cn. *akṛṣṭapacyā karṣaṇam vinā dhānyaprasūtaḥ*

<sup>41</sup>P. *pṛthivī* D. *ca mahī*

<sup>42</sup>*vilelihan* Cp. *vilelihan dīpyamānaḥ* Cs. *vilelikhan śāsanāni punaḥ punar vilikhan / vilelihann iti pāṭhe tāluga-stam jagat kurvann ity arthaḥ*

<sup>43</sup>*saptadhā* Ca. *saptadhā nṛtṭam nāthyam atra / yad āha bharatamuniḥ (Nātyaśāstra 24) Cp. pratyakṣaś ca praokṣaś ca tathā kālakṛtākhyayaḥ / ātmasthaś ca parasthaś ca prakārāḥ sapta nātyagāḥ // anye tu ṣaṭ saptadhā [dvi]cītvāriṃśaddhety artha itī vyācakṣate tad atīva tucchaṃ nṛttiviśeṣāvacaṇāt // Cs. nṛtyasya saptadhā prayogā gāndharvavedibhir uktāḥ / śuddham nṛtyam karaṇāṅgavihārānugatam tālānugatam vāhyānugatam lalanāvartanātmakam ceti /*

<sup>44</sup>*śamyākṣepeṇa* Ca. *śamyā yugakīlakanibhaṃ yajñapātraṃ tasyākṣepo yāvati deśe yatas tāvati deśe nīrantaram yajñam kurvanti* Cn.,Cs.: *sūksmāgrah sthūlamūlah ṣaṭtriṃśadaṅgulo daṇḍaḥ śamyā / sā balavatta (Cs. brahmākhyena ṛtvijjā) kṣiptā yāvad dūre pattet tāvad ekaṃ devayanam*

Cv. *śamī samidhā, tasyā yajñarakṣārtham daśadikṣu ākṣepo yatra tena vidhinā*

D. はこの句の前に、

*anantaram sahasreṇa tadāsīd daitya kā matiḥ // (D.23cd)*

を挿入している。

- (23) 今や、汝の金の水差しも、日傘もうちわも私は見ることはない。ブラフマンより与えられた汝の冠も私は見ない、アスラの王よ。

バリは言った。

- (24) 汝は、金の水差しも、日傘も、うちわも見ることはなく、ブラフマンによって与えられた私の冠も見ることはいないであろう、インドラよ。
- (25) ほら穴に<sup>45</sup>隠された私の宝について汝は尋ねる。私の時が来るならば、その時、汝はそれらを見るであろう。
- (26) しかし、目的を達成した汝が、目的を達成していない私を誹ろうとするのは、それは汝にはふさわしくない。榮譽からもあるいは家柄からも。
- (27) 英知を完成し、知識に満足し、忍耐ある真の賢者たちは、苦において悲しまず、幸運においても喜ばないのである。
- (28) 汝は、しかし、インドラよ、世間的な知識によって、おごっている。汝が将来私のようになれば、その時には、このようには話さないであろう。

(1999年5月25日 受理)

<sup>45</sup>guhāyām Cn. guhāyām mūlaprakṛtau nihitāni antarhitāni Cp. guhā devaguhā tasyām ajñānakarmajaniteśvara-prasattau, apūrvasṛṣṭau vā, paramaprakṛtau vā / apratīyamānasyāpi nāsattvaṃ, bhuvī maṇḍūkadehasyeva